



オンライン時代の海外派遣の一事例

神戸大学 経済経営研究所
准教授 江夏 幾多郎

2023年1月30日から5月11日まで、六甲台後援会の助成を受けて、イギリスに滞在しました。オックスフォード大学のThe Nissan Institute of Japanese Studiesから客員研究員という称号を付与され、様々な学内施設を利用しました。Nissan Instituteは、大規模な生産拠点を英国内に有する日産自動車の支援もあって1990年代に設立された機関で、日本に関連した、人文・社会科学領域の幅広い研究や教育が行われています。

私はこれまで、日本の人事管理について、現在の実態、あるいはこの四半世紀の研究者と実務家の関心の相違（Theory and Practice Gap）を調べてきました。これらについての意見交換を現地の研究者と行うこと。日本よりも研究に専念できる環境で思索を深め、論文や著書の執筆を進めること。これらが訪英の目的でした。

訪英に際し、気になっていたのが、日本で抱えてきた業務の継続性でした。私は、日本労務学会という学会の会長職の他、現在進行形のものも含め、いくつかの学術誌の編集委員を務めています。また、10名以上の参加者がいる大学院ゼミナールを、本学で主宰しています。いくつかの企業へのコンサルテーション、教育機関での講師、一般向け記事の連載も、兼業で行なっています。そして、日本の研究者との複数の共同研究プロジェクトに従事しています。

今回私は、日本で抱えてきた業務の大半をイギリスでも継続することにしました。主に日本国内での研究・教育業務や学外での活動機会とネットワークを維持し、再構築のコストを最小化するためでした。海外での業務継続に向けた障壁は、この数年、zoom等のオンライン会議ツールによって、従来よりもはるかに小さいものとなりました。これまでの業務を継続しつつ、新たな環境の「旨み」を享受する。こうした青写真を胸に抱いてイギリスの地を踏みました。

結果、日本で行なってきた業務については、ほぼ従来通りのペースで進められました。しかし、イギリスにいるからこそその研究上の視野の広がりや深まりは十分ではありませんでした。日本の業務に一定程度以上の時間を割いてしまったこと。日本のパートナーとの業務を日本時間に合わせて未明～早朝に行い、イギリスでの活動時間が歪なものになってしまったこと。これらの影響が、イギリスでの生活や研究活動に、じわじわと訪れました。海外派遣だからこそ得られる収穫を十分に得るには、日本での活動については一定程度以上見切りをつけないといけないと、強く感じました。

日本関連の時間と英国関連の時間のトレードオフが大きくなった背景には、経済的な要

因もありました。六甲台後援会からの助成は、額面としては決して少ないものではなく、ありがたいものでしたが、住宅費と渡航費でほぼ使い切ってしまいました。今回は100日程度の滞在だったので、1~2年程度滞在するために部屋を借りる時の家賃よりも、随分と割高になりました。いずれにせよ、日本以外での近年の物価高が、助成のポリシーに十分に反映されていないように感じました。

食費や交通費など、イギリスでの生活や研究活動に必要な諸々の出費は、個人の研究費、および私費で賄いました。ラーメン1杯で2000円はザラというように、イギリスを含む先進国の外食費は、日本と比べて相当に高いです。反面、スーパーマーケットや市場で購入する肉、野菜、調味料などは、日本と比して安いことも多かったです（魚類は日本よりはるかに高く、種類も限られている）。料理することが元よりある程度好きな人間が、こうした状況下で「節約はしたいけれども食事の水準は下げたくない」という意識を持ってしまったため、自炊の頻度が高まりました。調理の腕は磨かれましたが、結果として研究活動に割く時間が減りました。

これらを踏まえると、「今回の英国滞在は、壮大なワーケーションだったのではないか？」というのが、正直な所感です。これは決して悪い意味での発言ではありません。季節の移ろい、人間の生活空間における自然環境の取り込み、「街の中の大学」ではなく「大学としての街」、言葉を交わすことへのこだわり、キャッシュレス社会、生活のインフラや道具などに、日本との対比の中でのイギリスらしさを日々感じました。苦慮するところも多々ありつつ、全体的にはイギリスでしかできない生活を満喫しました。

これが私の研究のスタンス、スタイル、成果にどう反映されているのかを今の段階で自覚するのは難しいです。が、日本に閉じこもっていた時よりは、研究も含めた目の前の様々な事柄について柔軟に捉えるようになったような気がします（むしろ願望?）。

次の海外派遣の機会があるとしたら、日本での業務の影響がなるだけ生じないように、計画的に進めたい。そういうモチベーションが今強くあるというだけでも、前回の海外派遣は、良い経験だったのだと思います。